

恋愛関係および友人関係の捉え方における性差について<sup>1)</sup>**A study on sex differences in perceiving  
love relationships and friendships**

水野邦夫

青年期における異性間の親密な対人関係のうち代表的なものとして、友人（親友）関係と恋愛関係が挙げられる。両者はそれぞれ「友情」と「愛情」という好意的感情を基盤としており、この差異が友人関係と恋愛関係を区別するといえよう。

友情と愛情の差異については、これまでいくつかの定義がなされてきた。まず Rubin(1970)は、両者の感情を「好意(liking)」と「愛情(romantic love)」と称し、前者が他者に対する肯定的評価、尊敬の念、自己と相手の類似視に関連するものであるのに対し、後者は要求としての愛（いっしょにいたいと思う、身体的接触を欲する、など）、付与としての愛（相手に尽くすことが喜びとなる、など）に基づくと定義し、同性の親友には前者の方が、恋人には後者の方がそれぞれより強く感じられることを尺度的研究を通じて明らかにしている。また Berscheid & Walster (1978) は、異性に対する愛情形態として「友愛(companionate love)」と「熱愛(passionate love)」を挙げ、前者は持続的な感情状態であるのに対し、後者は強い生理的喚起を伴う情動経験であり、しばしば一過性のものであることを指摘している。一方 Davis (1985) は、受容や信頼といった形で表れる「友情」とそれに情熱や世話といった特性が付加した「愛情」という解釈をしている。このように、研究者によって用語や解釈に若干の違いはみられるものの、友人関係と恋愛関係にはやや異なった感情経験が存在することには異論はないであろう。

ところで、「男の友情の絆は堅いが、女の友情はもろい」とか「男は失恋の痛手をいつまでも引きずるが、女はすぐ次の恋愛に切り替えられる」とか

1) 本研究は、情報社会学科卒業生である野田倫行くんの卒業研究データをもとに、筆者が観点を少し変えて改めて検討したものである。野田くんには感謝の意を表します。

いうように、世間的な人間関係論や恋愛論は、その真偽はともかく、無数に存在する。これは、多くの人々が友人関係や恋愛関係に顕著な男女差があると信じていることの証左であるといえよう。この点、心理学的なデータも顕著な男女差を認めている。まず友人関係についてみると、Berndt (1981) は、男子は友人関係をグループとしてイメージするのに対し、女子は限られた少数との関係と考える傾向があることを報告している。また楠見 (1986) は、男子は集団の多くのメンバーの中心と周辺が明確で、多くのメンバーが何らかのつながりを持つピラミッド型構造をなすのに対し、女子は互いにつながりの弱い小グループに分かれた構造を持つことを見出している。さらに Eder & Hallinan (1978) は、男子は新たにつながりを持った第三者を従来の二者関係の中に取り込んでいこうとするのに対し、女子は三者関係として発展させず、もとの二者関係に収まることを明らかにしている。これらの研究をまとめると、男子の友人関係はいわば「中央集権」的または「連邦」的であり拡張的であるが、女子のそれは「小国濫立」的であり閉鎖的であるということができよう。また、別の指摘に目を投じると、Argyle & Henderson (1985) は、女子は深いレベルの自己開示や愛着、援助を伴う親密で信頼できる関係に価値を置くのに対し、男子は単に「楽しいこと」に価値を置くと述べている。そして男子は対人場面において不安や抑うつ感を統制することが期待されており、それゆえ女子のような親密な関係が築けないとも論じている。いずれにせよ、女子の友人関係は、男子と比べて、強い感情的つながりが背景にあるといえよう。

一方恋愛関係における男女差についてみると、まず松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田 (1990) は、Lee (1977) の恋愛理論に基づいて、6 類型の恋愛傾向を測定する尺度 (Hendrick & Hendrick, 1986) の日本語版を作成し、男女の違いを検討しているが、男子はアガペ的 (献身的・自己犠牲的) 恋愛傾向が高いのに対し、女子はルダス的 (ゲーム的)、プラグマ的 (実利的) 恋愛傾向が高いという結果を得ている。女子のルダス的傾向が高い点については、Hendrick & Hendrick (1986) の結果と異なるが、彼らの研

究でも女子はプラグマ的傾向が強いようである。さらに先の Argyle & Henderson (1985) も、女子の恋愛はクールで、めったに年下や下の階層の男性とは恋愛をせず、愛情がなくても結婚するなど論じている。また別の観点から恋愛関係の男女差に注目したものとして、堀毛 (1994) は、男子は社会的スキルの向上に片想いの段階における情熱や過去の失恋が影響を与えるのに対し、女子は恋人ができてからスキルを向上させることなどを報告している。これらの研究から、男子は純情で愛他志向の「衝動」的恋愛であり、女子は冷静で実利志向の「企図」的恋愛と捉えることができよう。

以上、友人関係、恋愛関係の男女差について概観したが、それでは友人関係と恋愛関係の位置づけについて、男女でどのような違いがみられるであろうか。つまり、友人関係と恋愛関係は近似したものとして考えるか、あるいは全く別の次元として捉えるか、などといった問題である。先にみたように、両者の基盤となる感情は異なるものの決して相対するものではなく、むしろ同一方向性を有している。しかしそれぞれの関係について男女に顕著な違いがみられるということから、それぞれの関係の位置づけが男女でかなり異なることが予測される。このような問題は、世間的には「友情と恋愛とどちらを優先するか」や「異性どうしの友情は成立するか」といったテーマでよく議論されるが、友人関係と恋愛関係の対比という点で男女差を調べた研究はまだ少ないのではないかと思われる。そこで本研究では、恋人、異性の親友、同性の親友との間で、ともにする行動にどのような違いがみられるかを調べることで、男女それぞれが友人関係と恋愛関係をどのように位置づけるのか、その違いを検討することを目的とした。

## 方 法

**被調査者** ある短期大学で心理学関係の科目を履修した学生128名（男子64名、女子64名）に対し、下記質問紙への回答を求めた。

**質問紙** 調査の実施にあたり、次のような質問紙を作成した。その概要は、まず恋人の有無（「いる」、「片想いをしている人ならいる」、「いない」、

のうちから1つを選択)、とくに恋愛感情を持っていない(すなわち、恋人や片想いの人ではない)異性の有無、同性の親友の有無について尋ね、次に Argyle & Henderson (1985, 吉森編訳, 1992) や松井 (1990) などをもとに、恋人どうしの間でなされる24の行動項目(表1参照)を掲げ、恋人・異性の親友・同性の親友のそれぞれに対して、各行動をどれくらい行うかを5段階で回答させる(ただし、恋人、異性の親友、同性の親友がいない場合は、もしいたとすればどうであるかを想像して回答するように指示する文章が書いてある)というものであった。

**手続き** 上記質問紙を授業時間の一部を利用して、集団法により実施した。所要時間は10~15分程度であった。

表1 2者間でする行動リスト

- 
1. 相手のプライバシーを尊重する
  2. 相手との時間の約束を守る
  3. 話しているときには、相手の目を見る
  4. 人前で相手のことを批判しない
  5. 他人が相手のことを悪く言っているときには弁護する
  6. 相手の秘密を守る
  7. 相手の日常生活に興味を示す
  8. 相手と2人きりで時を過ごす
  9. 相手に対してまごころをつくす
  10. 相手の誕生日にプレゼントをする
  11. 相手の友人にもやさしく接する
  12. 相手の悩みの相談にのる
  13. 相手のことを名字でなく、名前で呼ぶ
  14. 用もないのに相手に電話をする
  15. 相手の体に意図的に触れる
  16. 相手の悪い点をきちんと伝える
  17. よい知らせや話があれば一緒になって喜ぶ
  18. 相手が親切にしてくれたらお返しをする
  19. 相手がプレゼントをくれたら、喜びを伝える
  20. 相手に自分の素直な気持ちを伝える
  21. 自分のよいところをほめる
  22. 自分の友人のことを相手に話す
  23. 相手の傷つくことを言わない
  24. 相手に悩みをうち明ける
-

## 結 果

男女それぞれにおける、恋人のいる者、片想いの人ならいる者、恋人がいない者、異性の親友がいる者、同性の親友がいる者の度数は表2に示すとおりである。

表2 各群の度数

男子 (N=64)		女子 (N=64)	
恋人がいる	19	恋人がいる	22
片想いの人ならいる	14	片想いの人ならいる	13
恋人がいない	31	恋人がいない	29
異性の親友がいる	38	異性の親友がいる	46
同性の親友がいる	58	同性の親友がいる	63

註 単位：人

各群には、当然ながら同一人物が含まれるケースが少なからずある。そこで以後は、群ごとに各行動項目の代表値（平均値）を算出し、それをもとに検討を行うこととする。なお各群の各行動項目の代表値とは、たとえば恋人がいる群なら「恋人とどれくらい行うか」、片想いの人がいる群なら「もし恋人がいたらどれくらい行うか」、異性の親友がいる群なら「異性の親友とどれくらい行うか」…の回答についての平均値のことを指す。

**恋人と親友での行動の比較** 各行動項目について、恋人がいる者、異性の親友がいる者、同性の親友がいる者それぞれの平均評定値を算出した。その結果を表3に示す。各行動項目について、恋人と異性・同性の親友そして異性の親友と同性の親友の間でその平均評定値の差が絶対値で0.75以上離れているもの、および0.25以内のものに注目すると、「相手の日常生活に興味を示す」、「相手と2人きりで時を過ごす」、「相手の誕生日にプレゼントをする」、「相手のことを名字でなく、名前と呼ぶ」、「用もないのに相手に電話をする」、「相手の体に意図的に触れる」が男女でほぼ共通して恋人の方が異性・同性の親友よりも差の大きかった項目である。これらの行動は、恋愛関係を維持・展開するうえで特に重要な意味をもつ行動であることが推察されよう。ま

た男女で比較すると、男子は、同性親友が恋人を上回る項目がほとんどないのに対し、女子は「相手のプライバシーを尊重する」、「人前で相手のことを批判しない」、「相手のことを名字でなく、名前で呼ぶ」、「相手に悩みをうち明ける」など、いくつかの項目において恋人よりも同性親友の方が値が高くなる傾向にある。また、恋人 $\geq$ 同性の親友（ただし0.75以上の差）の項目数は男子では9項目あるのに対し、女子では3項目のみしかないことも特徴的である。これらのことから、女子の場合、同性の親友は「恋人対親友」という構図の中に存在するのではなく、「恋人以上」という存在となりうることを示しているといえよう。

表3 恋人・親友における各行動項目の平均評定値

項目	男 子			女 子		
	恋 人	異性親友	同性親友	恋 人	異性親友	同性親友
1	4.158	4.053 ‡	3.828	3.636	4.174	4.381
2	3.789	3.921 ‡	3.879 ‡	3.955	3.978 ‡	4.413
3	3.737	3.711 ‡	3.621 ‡	4.000	3.739	4.222 ‡
4	3.474	3.237 ‡	3.121	3.273	3.674	3.952
5	3.158	3.421	3.345 ‡	3.818	3.674 ‡	4.032 ‡
6	3.895	3.895 ‡	3.879 ‡	4.182	4.304 ‡	4.571
7	4.105	3.053 †	2.966 †	4.455	2.891 †	3.238 †
8	4.316	2.763 †	2.621 †	4.364	2.239 †	3.460 †
9	3.947	3.211	2.879 †	4.318	3.130 †	3.873
10	4.526	2.842 †	2.397 †	4.455	2.652 †	3.952
11	4.105	3.605	3.328 †	3.955	3.739 ‡	4.159 ‡
12	4.316	4.000	3.741	4.318	4.283 ‡	4.619
13	4.579	3.395 †	3.379 †	4.091	2.957 †	4.587
14	3.947	2.500 †	2.724	4.227	2.130 †	3.492
15	3.842	2.026 †	2.017 †	4.136	1.891 †	2.317 †
16	3.474	2.974	3.017	3.864	3.261	3.397
17	4.368	3.921	3.793	4.636	4.152	4.381
18	4.421	4.000	3.707	4.091	3.891 ‡	4.333 ‡
19	4.421	4.079	3.672	4.773	4.326	4.540 ‡
20	4.000	3.553	3.310	4.318	3.543 †	4.222 ‡
21	4.263	3.684	3.379 †	4.364	4.000	4.095
22	4.158	3.605	3.534	4.591	3.761 †	4.238
23	3.737	3.737 ‡	3.431	3.591	3.500 ‡	3.841
24	3.632	3.368	3.414 ‡	4.045	3.652	4.524

註 左端の数字は各行動項目の番号を指す（表1参照）。

†：恋人あり群との差が絶対値で0.75以上を表す。

‡：恋人あり群との差が絶対値で0.25以下を表す。

一方、男女ともにほぼ共通して恋人・親友間の差が小さかった項目は、「2. 相手との時間の約束を守る」、「3. 話しているときには、相手の目を見る」、「5. 他人が相手のことを悪く言っているときには弁護する」、「6. 相手の秘密を守る」であった。これらの行動は、恋愛・友人関係にかかわらず、基本的な社会的ルールに関するものであるといえよう。

**恋人の有無による違い** 次に、恋人がいない者は、恋人がいたらこれらの行動をどれくらい一緒にするかを調べるために、片想いの人ならいる者、全くいない者それぞれの平均評定値を算出した。その結果を表4に示す。先と同様に、恋人がいる者と比較して、ほぼ男女とも絶対値が0.75以上離れた項目

表4 恋人の有無における各行動項目の平均評定値

項目	男			女		
	恋人あり	片想い	恋人なし	恋人あり	片想い	恋人なし
1	4.158	4.143‡	3.903	3.636	3.923	4.172
2	3.789	4.357	4.194	3.955	4.077‡	4.207
3	3.737	3.857‡	3.710‡	4.000	3.692	3.897‡
4	3.474	3.571‡	3.355‡	3.273	3.462‡	3.448‡
5	3.158	3.571	3.645	3.818	3.615‡	3.414
6	3.895	3.929‡	4.194	4.182	4.385‡	4.517
7	4.105	3.714	3.484	4.455	4.077	3.793
8	4.316	3.857	3.452†	4.364	4.231‡	3.793
9	3.947	3.643	3.710‡	4.318	4.154‡	3.793
10	4.526	3.714†	3.677†	4.455	4.308‡	4.207‡
11	4.105	3.714	3.677	3.955	4.462	4.034‡
12	4.316	4.071‡	3.839	4.318	4.385‡	4.517‡
13	4.579	3.571†	3.581†	4.091	3.615	3.793
14	3.947	3.286	2.839†	4.227	3.538	3.069†
15	3.842	3.071†	2.903†	4.136	3.538	2.793†
16	3.474	3.357‡	3.290‡	3.864	3.231	3.379
17	4.368	3.786	3.710	4.636	4.308	4.414‡
18	4.421	3.786	3.903	4.091	4.000‡	4.310‡
19	4.421	4.000	4.032	4.773	4.462	4.586‡
20	4.000	3.857‡	3.677	4.318	3.846	3.793
21	4.263	3.643	3.806	4.364	4.231‡	4.000
22	4.158	3.357†	3.548	4.591	4.000	4.034
23	3.737	3.643‡	3.742‡	3.591	4.000	3.552‡
24	3.632	3.643‡	3.484‡	4.045	3.538	3.724

註 左端の数字は各行動項目の番号を指す（表1参照）。  
 †：恋人あり群との差が絶対値で0.75以上を表す。  
 ‡：恋人あり群との差が絶対値で0.25以下を表す。

をみると、「相手の体に意図的に触れる」であった。また男女で比較すると、女子の方が恋人との差が大きい項目が少ないのが特徴的である。

**各群の類似度について** 次に、恋人がいる者、片想いの人がいる者、恋人がいない者、異性の親友、同性の親友について、相手との行動に対する認知にどのような類似性がみられるかを検討する。各行動項目の平均評定値をもと

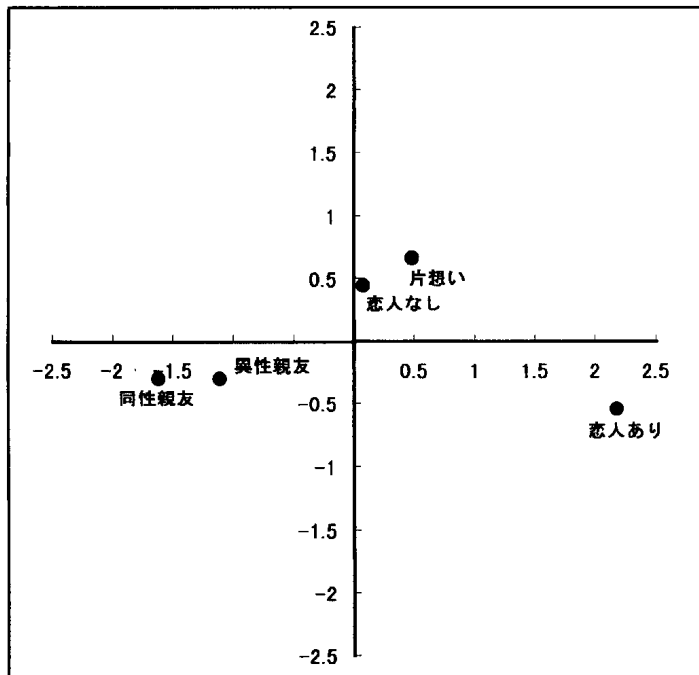


図1-1 各変数の布置 (男子)

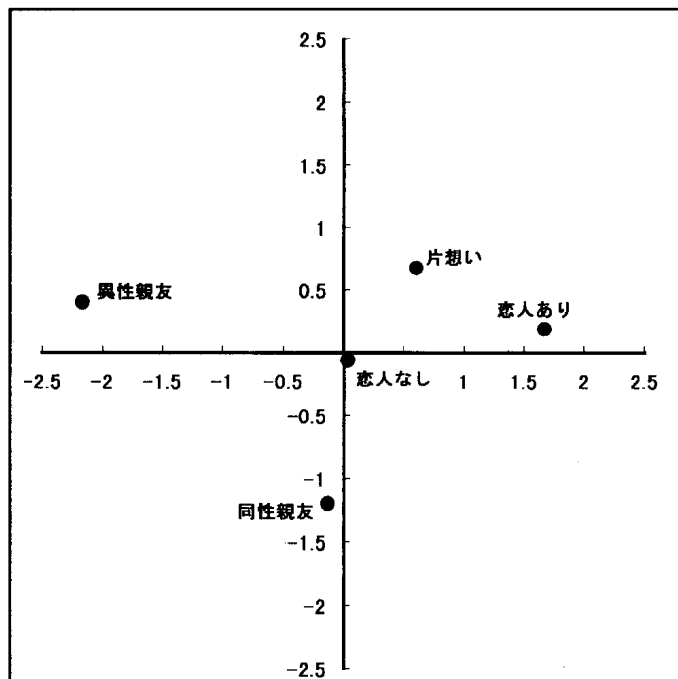


図1-2 各変数の布置 (女子)



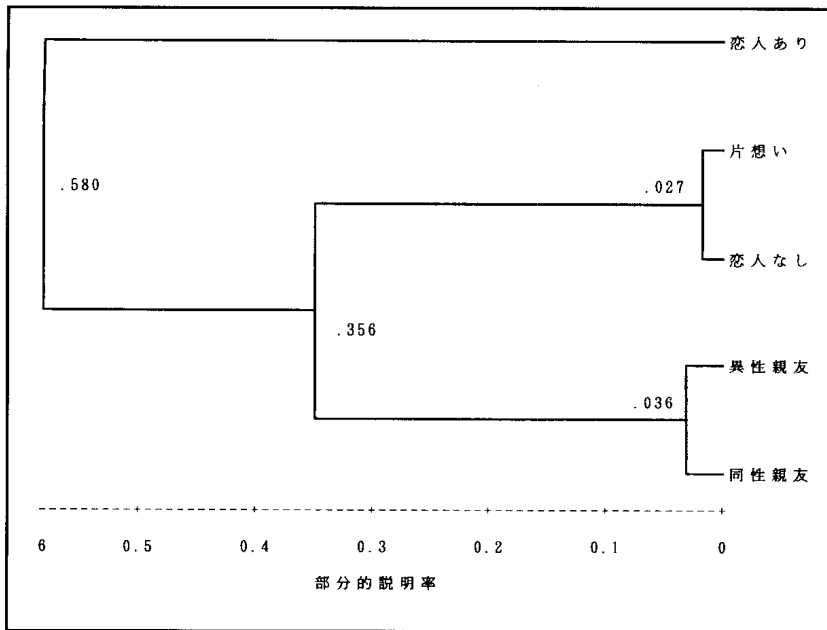


図 2-1 各変数のデンドログラム(男子)

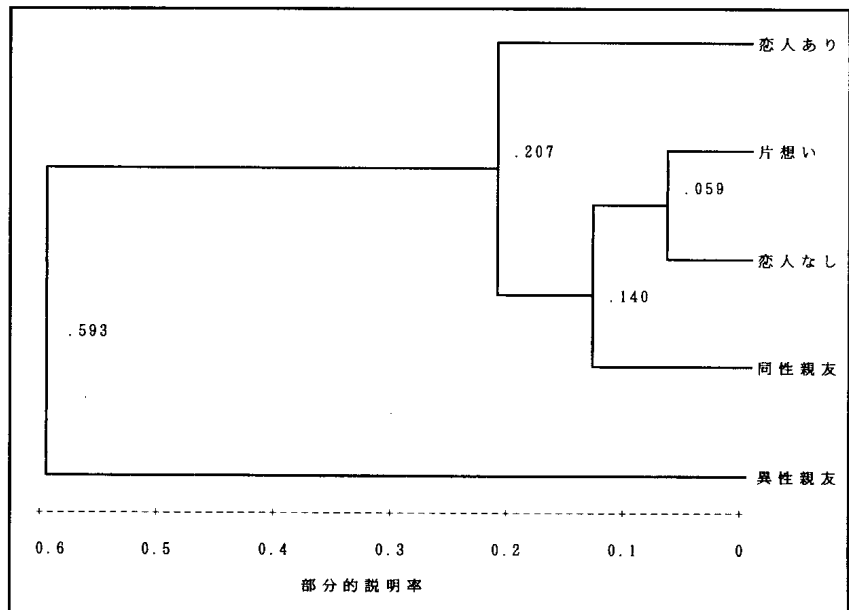


図 2-2 各変数のデンドログラム(女子)

に各群間のDスコアを算出し、その値を非類似度の指標として多次元尺度構成法（ただし非計量MDS）を男女別に行った。なお、収束値が0.01になるまで反復推定を行い、2次元解を採用したところ、最終のBadness-Of-Fit基準は、男子では0.00026、女子は0.0000であった。各変数の布置を図1-1および図1-2に示す。また同時に、クラスター分析（ウォード法による）も行った。それぞれのデンドログラムを図2-1および図2-2に示す。

図から、まず全般的にみて、恋人と親友の類似性はあまり高くなく、恋愛関係と友人関係は区別して捉えられているのが窺える。そして恋人がいない者は、恋人がいたらその相手とどのような行動をとるかと予測するときは、対親友と対恋人の中間として捉えようとする傾向があるようである。また、男女で比較すると、男子の場合恋愛関係と友人関係ははっきりと区別されており、しかも友人関係に男女の区別をあまりつけない傾向にある。一方女子は、同性の親友が恋人と類似する方向にあり、異性の親友がそれらと区別されるように見受けられる。また図1-2をみると、同性親友は恋人-異性親友とは別の次元に布置されており、女子において同性の親友が恋人-友人関係における特殊な位置にあることがわかる。さらに恋人がいない場合の行動予測については、男子はやや親友に類似するが、女子は恋人の方に近い傾向にある。このことから、恋人がいた場合の相手との行動について、女子は男子より正確な予測を立てているといえるかもしれない。

## 考 察

以上のように、恋愛関係・友人（親友）関係にある人物に対する行動をもとに男女の違いをみてきたが、第一に、男女ともに恋人と異性の親友との間に明確な区別がみられることが明らかになった。このことから、俗に言う「異性間の友情は成立するか」という議論に対しては「成立する（すなわち、恋人と異性の親友は別の存在である）」と結論づけられることになる。この区別は、恋人どうしの間で行われるべき行動には暗黙の社会的ルールが存在し、その制約を受けた結果生じたものと考えられる。ただし今回のデータは行動レベルからみたものであり、感情レベルにおいても成立するかどうかはわからない。

次に、より特徴的な点として、同性の親友の捉え方が男女で明らかに異なっていることである。すなわち、男子は同性の親友も異性の親友も同じ枠組みの中で捉え、恋人の対極にあるものとみなしているのに対し、女子は恋人と異性の親友は対極にあるものの、同性の親友は、類似性はより高いが別の

次元のものとして捉えているという点である。男女でこのような違いがみられる原因の一つとして、先に述べたように、女子の友人関係が強い感情的つながりを持っていることが考えられる。すなわち、女子の友人関係は心理的な結びつきが非常に強く、恋人の存在による影響を受けにくいのであろう。このことから類推すると、男子は恋人ができるとそれとのつきあいを優先しやすいのに対し、女子は恋人どうしのつきあいと同性の親友どうしのつきあいを両立させる傾向があることが予測されよう。

女子の同性親友の捉え方が男子と異なるまた別の原因として、女子の社会的性役割が影響していることが考えられる。Buss (1986) は、女子は伝統的に人の援助や同情に頼るように育てられてきたと指摘しているが、もしそうであれば、女子は男子よりも依存的となり、援助を受けられるより多くの仲間を必要とするであろう。そしてそのことが、同性の親友に恋人以外の存在としての特殊な位置づけを与えることになったと考えられよう。

最後に、前にもふれたが、今回のデータは2人の間でなされる行動に焦点をあてているため、結果が社会的ルールの制約を受けている可能性が考えられる。たとえば Rubin (1970) は、恋愛尺度と好意尺度の相関が男子において高い (.60、因みに女子は.39) ことを見出しており、この結果からすると、異性に対する友情と愛情が男子ではかなり類似していると考えられ、本研究の結果と合致していない。この不一致が、Rubin の尺度が相手とどんな行動をどれくらいするかではなく、相手に対する態度や感情を尋ねるものであることに起因するならば、今回のテーマは感情レベルについても検討する必要があるだろう。また、女子における同性親友の心理的役割については今回のデータのみからは不明瞭な点も多い。今後は互いの関係性を感情レベルから検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Argyle, M. & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships*. London : Penguin.
- (アーガイル, M・ヘンダーソン, M(著) 吉森 護(編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- Berndt, T. J. 1981 Relations between social cognition, nonsocial cognition, and social behavior : the case of friendship. In J. H. Flavell & L. Ross (Eds), *Social cognitive development : Frontiers and possible futures*. Cambridge University Press.
- Berscheid, E. & Walster, E. 1978 *Interpersonal attraction*. 2nd Ed. Addison-Wesley.
- Buss, A. H. 1986 *Social behavior and personality*. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates
- (バス, A・H(著) 大淵憲一(監訳) 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Davis, K. E. 1985 Near and Dear : Friendship and love compared. *Psychology Today*, **19**, 22-30.
- Eder, K. & Hallinan, M. T. 1978 Sex differences in children's friendships. *American Sociological Review*, **43**, 237-250.
- Hendrick, C.& Hendrick, S. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 392-402.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, **34**, 116-128.
- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.
- 楠見幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動、学級雰囲気、学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.

松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短期大学紀要, **23**, 13-23.

Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.